

蝸牛

「森林の伐採、石灰岩の採掘、マニアによる乱獲、シカが植生を食害することによる林床の乾燥化などにより、多くのカタツムリが絶滅の危機に瀕しています。」と、豊橋市自然史博物館の特別企画展の冊子『ザ・カタツムリ』（2013年）に書かれていました。地域の環境保全に取り組むことの必要性を、多種多彩なカタツムリたちに教えられるようです。

巻貝は海から陸への進出にもっとも適していた動物といわれます。早くも古生代に陸貝がいたことには驚くばかり。最初のもは殻口に石灰質のフタを持ち、現生のヤマキサゴがその姿を伝えています。おなじみのカタツムリは大触角の先に眼のある柄眼目に属し、その化石が見つかるのは新生代以降です。殻口にフタはなく、冬眠のときや夏のお昼寝ときには呼吸孔のある膜を張ってからだの乾燥を防いでいます。

♪つのだせ、やりだせ、あたまだせ♪ の「つのだせ」である大触角では触覚と光の明暗を、口元の小触角では触覚とにおいや味を感じています。カタツムリには雌雄の区別がありません。同じ種類が2匹あえば子孫を残せるのです。移動能力の乏しさならではの工夫なのでしょう。交尾の際には恋矢と呼ばれる石灰質の突起を相手に突き刺すものも多く、それが「やりだせ」の歌詞になったともいわれます。

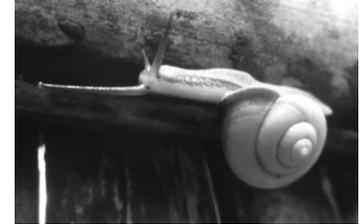
肉食昆虫や両生類、爬虫類、鳥やら獣やらの天敵に囲まれても、夜陰に紛れ葉陰に隠れながら何千万年、地域ごと環境ごとの種類になったのが、日本固有のカタツムリたちです。ところが、本州でも外来種のオナジマイマイやトクサオカチョウジガイ（共に東南アジア産）、コハクガイ（北アメリカ産）が見られるようになっていたり、オオクビキレガイ（地中海沿岸産）やコウラナメクジの仲間（ヨーロッパ産）が広がったりしているとか。それは、都市に植木やコンクリートがあるためかもしれません。

コンクリート、つまり石灰岩を食べるのは、殻の材料である炭酸カルシウムの結晶を体内で作り出すためです。卵から生まれたばかりの一巻き半程度の薄い殻が、五巻き六巻きのものに成長しきるまで、相似形を重ねるように結晶をつけ加えながら、螺旋を形成していきます。自然界に見られる対数螺旋（等角螺旋）の美しい形に、人類は大きな示唆を与えられてきました。アンモナイト、オウムガイの殻の美しさも有名です。

大きなカタツムリに出会うと、殻にはかなしみがつまっているという有名な新見南吉の童話『デンデンムシノカナシミ』が頭をよぎります。小さなカタツムリを見ると、私たちの両耳の奥にある直径1cm程の蝸牛（内耳の器官、哺乳類は螺旋状でヒトは二巻き半程度、鳥類などは管状）が想像されます。

幸田露伴は、自分の家や号を「蝸牛庵」としました。「身一つでどこへでも行ってしまうということだ。昔も蝸牛庵、今もますます蝸牛庵だ」。カタツムリにはそんな気持ちも託されたのです。

身近な存在ですが、見分け方が難しいものが多く、写真の同定には専門家のご指導を仰ぎました。いつまでも、その土地ならではのいろんなカタツムリたちに出会いたいものです。



クチベニマイマイ
法然院北坂にて 2017.9.16



オトメマイマイ
法然院北坂にて 2016.4.17



オオケマイマイ
法然院の森にて 2017.7.9



ニッポンマイマイ 褐色型
大文字川にて 2014.8.20



イセノナミマイマイ
法然院北坂にて 2017.9.7



ニシキマイマイ
比叡山にて 2015.7.5



ギユリキマイマイ
法然院南方面にて 2011.11.7